

聞き書き 岩手の年中行事

工藤 紘一

岩手県立博物館 研究協力員. 020-0117 盛岡市緑が丘 4-6-26. 4-6-26 Midorigaoka, Morioka 020-0117, Japan.

はじめに

昭和50年代後半に県内の数か所で年中行事の聞き取り調査をした。その一部は勤務していた岩手県立博物館の展示資料の説明に活用したり、刊行物に掲載するなど公表する機会があったが、県内各地の年中行事を比較してみるとという形で公にすることはこれまでになかった。紙数の関係で全部とはいかないが、機会を与えられたので、できるだけ報告しておきたいと思う。

調査した時から30年近い年月が流れた。今回まとめてみてもっとも驚いたのは、30年前にはまだ明治30年代生まれの人から話を聞くことが出来たのだ、ということである。現在では明治生まれの人から聞くなどということは不可能に近い。そういう点ではこの報告も多少は意味があるのかもしれない。

反省点も多くある。①聞き手である私が未熟であったため、話してくれた方々の知っていることを上手く聞き出すことができたかということ、②補充調査をするだけの時間的余裕がなかったため、欠落している部分や正確でない部分が多々あるだろうこと、③バランスから考えて、県南地域が手薄になってしまったこと、などは特に気にかかる。

このようにならかなり粗っぽい調査ではあったが、昭和50年代後半の時点で、これぐらいのことはまだ聞くことが出来たという証拠にはなる。平成も20年以上を経た今なら、やろうとしても無理なことは明らかだ。

明治後期から大正初期までに生まれた話者が、太平洋戦争以前の頃までのことを念頭に語ってくれている。したがって月日のほとんどは旧暦であると思って差し支えない。話者の敬称は略させてもらった。

1. 種市町横手の年中行事

話者：板橋治右衛門・板橋フミ

時期：昭和58年2月

①年末・正月の行事

12月27日 煤はき 柳の枝を取ってきて箒を2

本作り、適当な長さの柄をつける。煤はきは神棚から始める。カギツゲ（自在鉤）も早くする。台所の梁の上に結わえて祀っておいた松も下ろす。鍋の底の煤もこの日に落とす。集まった煤は捨て、松はトナガマに入れ燃やす。この日より前に煤はきをする場合は、八戸のマチノヒ（三日町、十三日町、十八日町など）にやればよいという。

この日の晩にはご飯を炊いた鍋を洗わないまま、それで豆を炒る。その豆を一升枡に入れ神棚に供えてから、「福は内、鬼は外」と唱えながら年寄りが撒き、家族は自分の年齢の数だけ拾って食べる。節分には豆まきはしない。この日は米の飯を食べる。

12月28・29日頃 餅つき 餅つきの日は特に決まっているわけではない。昔、家族が15人もいた頃は粟餅を2斗、米の餅を1斗か1斗5升ついた。これでも大人数だったので大正月のうちになくなった。この家から嫁に行った人たちにもくれてやった。米はこの辺では取れなかった時代なので、八戸まで出かけて餅米を買って来たものである。

門松準備 27日の煤はきが済んだなら、山から門松を伐ってくる。日にちは特に決まっていはいない。飾るのは2本で、五階の松は台所の梁の上、三階の松は神棚である。五階の松はそう多くあるものではないので、かなり前から目を付けておく。伐って来たなら大晦日までは庭に積んだタキギ（薪）の上に置くことになっている。正月にスボド（囲炉裏）で焚くタキギを特に用意するというわけではない。

大晦日 門松を立てる。トシナ（年縄）を作り神棚に飾る。年取りと元日は魚を食べない。

1月1～7日 大正月 3日と5日に神棚へお神酒を供えるぐらいで、特別にすることはない。

1月1日 若水 汲むのはその家の年配の男で、朝早く汲む。川の水を使っていた頃はそこから、井戸を掘ってからは井戸から汲んだ。汲むとき、川や釣瓶に餅を入れた。この若水でご飯を炊く。若水で顔を洗う

と若くなるという。

1月2日 レイト（礼人） 新婚の夫婦が嫁の実家へ挨拶に来る。酒を2升樽で2つ土産として持ってくるもので、4泊した。実家では「レイトが来る」といって、親類の人たちも呼び祝ったものである。

1月11日 肥出し 1カギでも2カギでもよいから、厩から庭に肥を出す。

1月11日 山の神さんのお礼 家族の男の数だけトシナをなつて、山へ持って行って納めて来る。その帰りに若木を伐って来て、それをスポド（囲炉裏）で燃やす。これにあたれば若返るといふ。

1月14日 小正月の餅つき

1月15日 小正月 小正月は15日から20日までである。後正月とも女の正月であるとも言う。15日と16日には魚は食わない。

1月15日 マーダマ 餅で桜、梅、大判・小判を、そば粉でスズメダングをこしらえてアカキ（ミズキ）に挿し、神棚のところへ飾る。これをマーダマと呼んでいる。14日の餅つきの後に作り、15日に飾る。下げるのは20日で、下げることを「引く」といふ。

1月15日 ホガホガ 夕飯前に、豆の皮とソバの皮をまぜたのを撒きながら、家の周りを3回周った。「豆の皮もホガホガ、ソバの皮もホガホガ、銭コも金コも飛んで来い。馬コも牛コも飛んで来い。ヤーラホラ飛んで来い」と大声で叫んで歩いた。「隣の家に聞こえるように大声を出せ」と言われたものだ。主として子供たちの行事である。

1月15日 ヤッカガシ ハシギ（箸を作る木）を伐って来て、先端を割り、焼き豆腐を挟んで、それをスポド（囲炉裏）で焙って、晩に家の入口や戸ごとに挿した。煮干を挟む家もある。

1月15日 道具の年取り ふだん使っている道具に年を取らせる。臼、杵、桶、甕、碾臼などにトシナ（年縄）を張る。ヒヤグの柄には昆布と松の葉をつける。カギジョウ（自在鉤）には餅をぶら下げる。

1月16日 お蒼前参り 朝、大きい小豆団子を2個、小さいのを10個作って膳に載せ、箸を使って馬に食わせる。栗の木を2本伐ってきて上座敷前のニワに立て、それぞれ笹と柳を結びつけ、2本の間にトシナ（年縄）を張る。マヤから馬を出し栗の木に繋ぎ、笹と柳を食わせる。米と銭を混ぜたものを3合位この馬に向けて縁側から撒く。栗の木などは20日に引く。

1月16日 ガワ 中座敷の前のニワに長い竿を1

本立て、先端に竹のガワをつける。このガワからトシナ（年縄）を垂らし、擦り切れたツマゴをぶら下げる。20日に引く。

1月20日 二十日のメダシ ドービギをして遊ぶ。そのとき姪まで賭けるのでメダシなのだといふ。

1月20日 二十日のご祝い この日で小正月は終わる。米の飯を食べる。小正月が終われば、男はマヤから肥出し、女は刺し子などの仕事をした。

1月23日 火祭り 別当様を呼び、火祭りの祈祷をしてもらう。別当様はお札をくれる。

1月23日 二十三夜様 二十三夜様を見ながら、その出る方角や大きさなどによって世中を判断する。本当は月の出から月の入りまで見るのだがといふが、実際には月の出だけを見ている。火祭りと二十三夜様は板橋地区の4軒が回り宿でやっている。

1月30日 2月年取り

②春・夏の行事

2月1～3日 厄年の人がいる家で祝う。厄に負けるからといって、この間に厄年の人のいる家に行くことを嫌う。

彼岸 お寺参り（東海寺）をして塔婆をもらい、それを持って鹿糠地区にある墓へお参りする。

3月3日 赤飯を炊き、ご馳走を食べる。八戸の蕪島神社へお参りできる人は行く。

3月16日 農神様 農神様が山から下がり、それと交代して雪神様が上って行く日だといふ。餅や団子を作り、16個供える。

5月4日 晩に、菖蒲と蓬を戸や窓に刺す。

5月5日 菖蒲で鉢巻をする。鬼を寄り付けさせないためだといふ。菖蒲酒を飲む。

5月5日 レイト（礼人） 新婚夫婦が嫁の実家へ来る。1晩泊まる。

6月1日 モモオケ 蛇が剥け替わるように、この日は人も剥け替わるのだといふ。

7月7日 七日盆 夜に松を焚く。小麦粉でハットウを作りホトケサンに供える。

7月13日 盆 鹿糠地区にある墓へお参りする。墓前で松を焚く。家では棚を作り、コモを敷き、その上にハットウなどを供える。庭で松を焚く。

7月14日 盆 ご飯を供える。墓参りする。

7月15日 盆 赤飯、煮しめ等を供える。墓参りする。

7月16日 ホトケサンを送る 赤飯を供える。箕

の上に葡萄の葉を敷き、それに赤飯を載せる。無縁サマの分も載せる。無縁サマとは祀ってくれる縁者のないホトケサマのことで、これにも必ず供えることになっている。赤飯のほかに、麦の餅、百合の根、キュウリなども供える。麦の餅はホトケサンの「背中当て」だという。今は煎餅で代用しているので背中が痛いことだろう。供え物をコモで包んで川に流す。これを「ホトケサンを送る」という。午前11時頃までには送る。

7月16日 盆踊り・相撲 昔は16日まで踊った。川尻、小橋、鹿糠地区などまでは踊りに出かけた。また、盆が終わった頃に各地区で相撲があり見物に出かけた。相撲は夜やった。

③秋・冬の行事

8月15日 枝豆を採り、お月様に供える。

9月16日 農神様 3月に山から降りて来た農神様が帰って行き、交代して雪神様が来る。餅や団子を16個供える。

9月29日 クニチモチ 28日の晩に餅をつき神様へ供える。この餅をクニチモチという。

10月20日 二十日講 秋じまいのお祝いで、それまで農作業を手伝ってくれた人たちを招きご馳走をする。

11月24日 オダイシコ ニクルミ（お汁粉）をこしらえて、柳の箸を膳に添えて供える。オダイシコには子供がたくさんいるので、ニクルミを食べさせるとき長い柳の箸を使うのだという。

12月5日 五日恵比寿 恵比寿様の年取りで、魚を供える。

12月9日 九日お大黒さん 大黒さんの年取りで、ソバのハットウを作り供える。マダカア（二股）大根2本も必ず供える。

12月12日 山の神さんのお年取り 稗スツギを12個供える。山の神さんに供えた物を若い女の人には食ってはいけない。食うと12人も子供を産むことになる。

12月16日 オシラサマの年取り 板橋家にはオシラサマが^{ふたかしら}2頭(4体)ある。農神様だと思っている。この日は餅や団子を作り16個供えることになっている。

2. 九戸村伊保内・戸田の年中行事

話者：稲森源右衛門・木村米蔵・村田マツ・岩淵五助

時期：昭和56年3月

①年末・正月の行事

12月25～28日 煤ばらい 家によって違うが、25日頃から始めるところもある。遅くとも28日までにはする。集めた煤やゴミは焼いてしまうが、それが原因で火事になることがよくあった。川に流してしまう所もある。煤ばらいのための箒は箒草と萩の木を束ねて新しく作った。高い所の煤をはらう時は、それにホゲ（ササゲの手などに使う棒）を結びつけ、柄にした。煤ばらいの日に豆まきをする家もある。この日に豆まきをすれば、節分にはしない。豆まきの豆を炉に12個並べ、12か月の天気を占った。豆にオキをつけ、プープーとなればその月は風が吹き、よく燃えれば天気がよいなどと判断した。

12月28日頃 餅つき 年取りの前日につくことが多い。29日は苦の日で縁起が悪いといい、神棚にさわったり、注連飾りを買うことを避ける人もいる。そういうことを気にしない家では29日でも餅をつく。

大晦日 年取り 神棚と仏壇にお供えとお神酒を供えて年を取る。

1月1～7日 大正月 大正月を「男の節供」とか「男の年取り」という。これに対して、小正月は「女の節供」、「女の年取り」である。大正月は7日まで、小正月は15日が年取りで、16日から20日までである。正月には神楽やエンブリや大黒舞などが来たものであった。

1月1日 若水 早朝に若水を井戸や川から汲む。鳥が鳴かないうちに汲むのだという。また、他人に見られないように汲まなければならないともいう。汲むのはその家に年男（厄年の男で22歳、32歳、42歳）がいれば年男、いなければ一番若い男が汲む。汲む時は餅を持って行き、井戸や川に供え、「悪を払って福を汲む」と唱えながらヒヤグ（柄杓）で3回汲む。その後、「竜神様にお供え申す」と唱えながら、餅をちぎって3回投げ、拍手を打ちヒヤグで3回汲む。供えた餅を持ち帰って食べると歯を病まないという。若水でご飯を炊き、神棚や仏壇にも供えた。朝食は、主人は足のついた膳を、それ以外の者は足のない膳を使ったものである。

1月1日 正月礼 晩に、小作人が地主のところへ酒1升持って挨拶に行く。これを正月礼という。地主はこの人たちにご馳走をする。

1月2日 舅礼 昼頃、若夫婦は嫁の実家へ行く。これを舅礼という。結婚後、3年間これを続けなければ、嫁を取り返されるといわれている。土産は酒と魚と餅で、このため婿の家では1白（3～4升）余分に

ついたものである。5日頃には婚家へ戻る。

1月7日 七草粥 七草粥を食べる。粥のほかに、芹・豆腐・人参・蕨・落などを入れた雑煮餅を作り、これを神棚や仏壇に供える。この日までが節供である。

1月11日 肥出し マヤから肥を出しニワに積んでおく。この肥の熱を利用して納豆を作ることもあった。藁で作ったツトを古い布団などでくるみ、その上に肥を載せておくと、3日から1週間位で納豆ができたものである。

1月12日 山の神様 うる米を水に浸し、それを臼で搗いて粉にし、湯でこねてまるめる。これがストギ(稜)である。ストギ12個と豆腐12個をお盆に載せ、お神酒と共に神棚に供え拝む。

1月14日 餅つき 小正月用の餅をつく。

1月15日 小正月の年取り ミズキ団子を神棚のある座敷に飾る。ミズキは12、13日頃伐り、団子は14日に刺しておく。団子のほかに繭や鶏・牛・犬・臼・杵などの形を作り、ミズキに刺した。藁に、小さく切った餅を10個位つけたもの（これをイナボという）や、竹に栗餅をつけたもの（これはアワボ）も、ミズキと一緒に飾った。ミズキ団子は豊作を祈願するものである。

1月15日 道具の年取り 日ごろ使っている鍬・鋤・鋸・鎌などの道具類をミズキの下に並べ、餅を供えて年を取らせる。

1月15日 鍋伏せ 膳に米を敷き、その上に、柔らかな切り餅に米・稗・粟・ソバ・麦・大豆・小豆など作物の名を書いたものを並べ、上から鍋を伏せる。これで「世中を見る」のである。翌16日の朝、鍋を取り、どの餅に米粒が何粒くっついたかでその年の豊凶を占うのである。3粒以上ついていると豊作だという。鍋伏せはミズキの下でやる。

1月15日 栗刈り 年を取らせた鎌を使って、アワボを竹から取るのを栗刈りといい、これが済めば炉に足を入れてもよいとされた。これより前に炉に足を入れ、灰を乱すのは堅く戒められた。それをすると、春になって水苗代に鳥が入り込み、荒らしまわるのだといわれた。

この日の朝、最初に鳴いた鳥が鳥であれば物価が上がり、雀であれば物価は下がるという。夜には悪魔払いや悪病除けのために、炭や餅を挟んだ年縄を道路の曲がり角に張っておいた。月の出を拝み、その大きさとか方角により世中（農作物の出来具合）が良いとか、悪いとか言ったものである。

1月16日 掛け軸を拝む 家にある掛け軸を全部出し、座敷に掛けて拝む。槍や刀も出したものだ。このようなことをするのは、年にこの日だけである。

1月20日 ポーポー 餅を持って畑へ行き、「ネアン、ポーポー」と叫びながら餅をちぎって投げる。そうすると鳥が集まって来て、その餅を食べた。

1月20日 ドッピギ この日はドッピギをして遊んだ。賭ける銭がなければ姪を賭けてまでしたものだからといって、「二十日の姪出し」という言葉がある。主婦たちは豆腐を賭けてした。悪魔を払うため煮干を串に刺し、それを家の入口に刺しておく。この日はソバを食べることになっていた。

小正月の最後の日で、翌21日から山へ出て働くのである。

1月23日 晩の月の出具合でその年の豊凶を占う。宿に集まり、煮しめを食べ酒を飲みながら月の出を待った。東の方を見ていると、月は真夜中になってから出てきた。大正頃までは実際にしていた。

1月23日 オボコビラキ お供えのことをオボコといい、この日食べる。これで正月は終わりとなる。

庚申 庚申の日にお神酒上げをした。

火祭り この年最初の壬辰の日に火祭りをする。この日拝めば火事にならない。

②春・夏の行事

2月1～3日 2月の節供 この3日間は米の餅や栗餅などご馳走を食べ、仕事は休んだ。

2月1日 2月の年取り 男は42歳、女は33歳が厄年なので、これに当たる人たちはご馳走を食べ酒を飲み、厄払いをしたものである。

2月9日 山の神様 山の神様の日なので、「山を鳴らすな」（山で音を出すな）という。山で音を立てることが出来ないで、木伐りもこの日は山に入らない。この日は山の神がミズキのウラ（先端）で生まれた日で、ミズキが赤いのはそのためである。山の神様がこの日、山の木の数を調べるのだともいう。

2月20日 山の神様 この日も「山を鳴らすな」といい、山に入ることや木を伐ることは禁じられていた。これが終わると本当に春がやって来るという。

彼岸 中日に念仏をする。これは今でもやっている。寺に年寄りが集まり（お婆さんが多い）、「ナムアマダブツ」と唱えながら、数珠を千回まわす。これを百万遍という。悪病除けのためやるのである。昔、各地に腸チフスがはやったとき、戸田地区で百万遍をしたが、

この地区だけは腸チフスにかからなかった。念仏は葬式のときもやる。このときは数珠を60回まわすので六万遍という。数珠は寺から借りてくる。

長興寺地区でも寺で念仏講がある。集まるのはお婆さんたちで、数珠を20回ずつ3度まわす。合計60回まわして6万回まわしたことにする。最初の20回ときの唱えごとは「ナムアマダブツ」、中の20回は「ジロウジンザイ ナムアマダブツ」、最後の20回は「ナムシャカムニブツ」である。

春の彼岸に、田のクロ（畔）が見えるくらい雪が融けていると、その年の天候は順調に進みそうだと喜んだものである。

3月3日 お稲荷様の祭り

3月3日 銭まき節供 朝、近くのお宮に参詣する。そのとき、遠方の神社までは行けないが、その分まで賽銭を投げるので、境内には賽銭が散らばる。子供たちはそれを集めるのを楽しみにしていた。

3月16日 農神様 この日、農神様が山からやって来る。十六団子（ヘッチョコ団子ともいう。団子の真ん中を指で押しへこませたもの）を作り供える。春になると空気がユラユラと動くように見えることがあるが、それを見て「農神様が来ている」といったものである。

4月8日 神明社へお参り 寺沢の神明社（九戸神社）へお参りする。寺参りはしない。

4月24日 秋葉神社の火祭り 150年も前のことだが、長興寺地区120軒のうち、焼け残ったのが3軒だけという大火があった。その後、秋葉神社を祭り火事にならないようにした。この日は参道に赤い旗や白い旗を立てたものだ。戦後はやらなくなった。

5月5日 端午の節供 蓬と菖蒲を軒に挿す。鬼除けのためだという。挿すのは4日の晩で、5日に蓬と菖蒲がしなびていると、秋の世中がいい（豊作であるとの意）と喜んだものである。家族全員が家の中に揃っていれば挿すが、1人でも欠けていると挿すのは見送ることになっている。

ある所に、3人前稼ぐ嫁がほしいという男がいた。そこへ、ものをあまり食べないで稼ぐという娘が来たので、気に入って嫁にした。嫁は少ししか食べないので3人前も4人前も稼ぐので、婿はおかしいと思うようになった。ある日、薪取りに行くと言って、屋根裏に隠れて嫁の様子を見ていた。1人になった嫁は蔵から米を持ち出してきて、トナ釜（農家の土間に造られ

ている竈用の大釜）で飯を炊いた。髪を真ん中から分けると頭に大きな口があり、そこへどんどん飯を入れ、米2袋分もたいらげてしまった。端午の節供になり、舅札をするため土産として2斗の米で酒を造った。嫁が酒樽を背負い2人で出かけた。やがて沼に着くと、嫁は酒樽を沼に浮かべた。それに乗って行くと、しばらくして島が見えた。島に着くと嫁は、「今、来たじよ」と大声で叫んだ。すると鬼が出てきたので婿は恐ろしくなり逃げて近くの柳の木に上ったが、鬼の子どもが追いかけて来て柳の木をほろった（揺さぶった）。婿はさらに逃げて、蓬と菖蒲の生えている所へ飛び込んで身を隠した。鬼は追いかけて来たが、蓬と菖蒲の臭いがいやだと言って帰って行ったので婿は助かった。

こういうことで、5月5日には鬼除けのため蓬と菖蒲を軒に挿すのだという。

(新) 5月8日 九戸神社の祭り 九戸神社は古くは北辰妙見宮と称し、承和9年(842)の創建と伝えられる。天正3年(1575)に山火事により焼失。江戸時代には藩の保護を受け、明治初めに九戸神社と改称した。村内はもちろん九戸郡内の人たちから篤く信仰されている。

6月1日 ムケ節供 蛇の皮が剥ける日である。「桑イチゴを採りに行く」というと、「桑の木に蛇の皮が引かかっているから行くな」と言われたものだ。

6月15日 ハットウ(手打うどん)を食べる 理由はわからないが、この日はハットウを作って食べるようになっていた。田植えも終わって一休みできる頃だった。

6月24日 虫祭り てんとう虫や青い虫を取り、それを紙に包んだのを旗をつける竹の先端に結わえ付けた。旗には「五穀成就、悪虫退散祭」と書き、太鼓をたたき、行列を作って隣の地区との境まで行き、そこへ捨ててきた。藁人形を作り、これが行列の先頭になった。隣の地区からも同じように行列が来るので、よくイザコザがおきたものだ。戦後はやらなくなった。

7月7日 七日盆 この日も節供である。ハットウを作って食べる。

7月12日 墓掃除 墓掃除はもちろんのこと、地域全体の道路掃除、川掃除などもした。

7月13日 盆花採り 朝、盆花を採って来る。盆花とは桔梗のことである。

7月13日 盆棚 盆棚を作り、桐の葉にご飯や煮しめなどを載せて供える。

7月13日 迎え火 お盆なので13日から16日まで、夕方に迎え火として松の根を焚く。

新しいホトケサマのある盆のときは、3年間、48本のローソクを点けてホトケサマを迎える。13日と14日にこれをする。「四十八を点けるから来てくれ」と親戚を招く。1本だけは大きなローソクを点ける。これはソーズカババの分である。ソーズカババの許しがないと、ホトケサマは極楽に行けないのだという。

7月16日 盆の終わり 16日の昼過ぎには、盆棚に供えたものをコモで包み昆布で結わえて送る（川に流す）。送るのが遅くなればホトケサマが泣くという。

盆踊りは本当は16日にするものだが、実際には13日頃から踊っている。唄は「ナギアトヤーレ」で、「ナギアトヤーレ、ナギアトナサレテ、ナギアトヤーレ」という文句を繰り返す。ホトケサマの供養のために寺の本堂の前で踊ったものだ。

7月17～19日 神明宮の祭り 戸田地区の神明宮の祭りで、17日はオミコシを担いで神明宮から八幡様へ移す。18日の中日には剣舞・獅子舞・セツ物・神楽などが出て、門打ちする。19日には八幡様から神明宮へオミコシがお帰りになる。

③秋・冬の行事

8月15日 枝豆を供える 枝豆を神様に供える。枝についた豆を食べ、その殻は屋根に投げ上げる。四つ豆（ひとつのサヤに豆が4個入っているもの）が当たれば、それは果報豆だから大事にしろという。

彼岸 米の粉で団子（小豆餡を入れる）を作り、入り彼岸と送り彼岸の2回、寺へ持って行きホトケサマに供える。

9月16日 農神様 農神様が戻って行く日なので、餅や饅頭をこしらえて土産として供える。農神様が戻ってゆく途中に雪神様と行き会って、「オレは土産をこんなにたくさんもらって来た。オマエはこれから行って踏んづけられる」というのだそうだ。

9月29日 農神様 餅を搗き農神様へ供える。「9月9日は百姓のオゴリ、後の9日（29日のこと）は餅を搗く」というが、意味はよくわからない。これまで働いてくれた人たちを招きご馳走をする。

長興寺の境内に樹齢450年といわれる大銀杏があるが、その葉が秋になって色づきがよく、1度に落ちてしまえば翌年は豊作、色づきが悪くてチリチリに落ちるようだとケガズ（飢饉）だという。

10月20日 恵比寿講 二十日講ともいう。この

頃になると農作物の取り入れも終わり、外での仕事としては馬を使って肥を出し、田畑に散らしておくくらいなものである。

11月24日 ダイシコ ダイシコ・カユコ（粥）を炊き、長さ1尺位の萩の箸3本を添え、神棚に供える。下げたものを家族で食べる。ダイシコは貧しいのに子供がたくさんいたので、ご飯だと皆に行き渡らない。そこで粥にして食べさせたのだという。

12月3日 稲荷様の年取り 豆ストギ（黍）を作り供える。

12月5日 お恵比寿様の年取り ご飯を供える。

12月9日 大黒様の年取り マダカァ（二股）大根を供える。

12月12日 山の神様の年取り ストギと豆腐をそれぞれ12個供える。山の神様に供えたものは女の子には食べさせない。食べると12人子どもを産むとか、赤い顔の子を産むとかいう。

12月16日 オシラサマの年取り ウキウキを供える。これをヘッチョコ団子とか十六団子ともいう。オシラサマは目の神様だという。

3. 二戸市下斗米の年中行事

話者：中村一

時期：昭和58年2月

①年末・正月の行事

12月26日 煤はき ヤマガを伐った後に出る若い枝の3年位のものを取り、束ねて箒にする。取るのは前日頃だが特に決まっているわけではない。煤はきはカギツゲ（自在鉤）から始め、明きの方に向かって掃き始めることになっている。炉の火に灰をかけてから始める。煤はきが終われば、箒を焚き付けにして火をおこす。煤は捨ててしまう。最近はこの日に豆まきをしたりする。夕ご飯の後に鍋を洗い、それで年男が豆を炒り、撒く。

12月26日 門松迎え 山から三階の松を伐って来る。年取りの晩に、神棚を吊っている柱に結わえる。年取りの晩までの間、松を特別に扱ふようなことはない。

大晦日の前日 餅つき 1軒で3～4臼位搗く。1臼は3～4升で、米の餅と粟の餅を搗くが、その割合は3対1位である。餅つきをしてはいけないという日はない。

大晦日 カケトシナ カケトシナを作る。御幣・松

の葉・煮干・木炭を挟んで飾る。飾るのは床の間・常居・台所・納屋の4か所で、1月14日に取り外す。

大晦日 ミダマ 握り飯を5個作り、それに家のホトケサンの数だけ箸を立てる。これを盆に載せて仏壇に供える。

大晦日 米伏せ 盆に粟を敷き、粟餅3枚を載せて土間に置く。その上にシメを張った臼をかぶせる。1月7日にこの臼を起こし、餅に粟がどれ位くつついたかで、その年は早生・中生・晩生のうちどれを植えればよいかを占う。

大晦日 年取り 夕飯が済めば、年を取ったと思った。

大晦日 二年参り 夜に近くの大宮神社に参詣する。参詣のため年内に家を出て、新年にまたがるのを、二年参りという。

1月1日 大正月 1日から8日までが大正月である。七・五・三といって、大正月は7日間、小正月は5日間、二月正月は3日間休むことになっているが、実際には大正月は8日まで遊んでいたものである。

1月1日 若水汲み 跡取り息子が若水を汲むことになっている。餅を1枚持って行き、井戸に投げ入れてから汲む。特に新調したというわけではないが、若水を汲む桶はふだん使っているものではなかった。若水を汲んだ桶は米伏せの臼の上に置いた。この若水で元日の朝食の支度をする。朝食は米の飯である。食べる前に、今年も若々しくて丈夫であるようにとの願いを込めて、家族全員で若水を飲む。

1月1日 寺参り 年始のため寺参りをする。

1月2日 シュウド(舅)礼 新婚夫婦はこの日に嫁の実家へ行き、2日位泊まる。あまり長く泊まれば、「皿が欠ける」(皿の数が少なくなる、即ちご馳走が悪くなるの意)という。シュウド礼は3年間続ける。

1月4日 檀家まわり 和尚さんが年始の挨拶のため檀家まわりをした。

1月5日 若水汲み 朝、若水を汲む。

1月6日 オコモリ 夜、大宮神社でオコモリをする。昔は神様を拝んで夜明けまでいた。

1月7日 粥 大晦日に仏壇へ供えたミダマを用いて粥を作る。芹を入れる。

1月8日 ナエナエ(ポーポー) 朝、米伏せの臼を起こし、その餅を焼いて鳥に投げ与える。山の神様に供えるということらしい。「ナエナエ」とか「ポーポー」とかいて鳥を呼び寄せた。

1月8日 豆殻を燃やして朝ご飯を炊く。その火に当たればその年は蛇にかまれない。

1月11日 御用始め 農家では山から木を1、2本伐って来て立て、その側にマヤ(馬屋)肥えを出す。草履とか馬の腹帯なども作る。

1月15日 朝は餅は食べないことになっている。

1月15日 繭玉 分家から手伝いに来てもらい、常居の飾り付けをする。繭玉とはオカラにソバ粉を混ぜて作った小さな団子のことで、これを5本のミズキに挿す。3本の家もある。粟穂は小判状にした粟餅を若竹の先端に挿したもので、7本作る。稲穂は藁に餅を巻きつけたものを数本まとめて房状にしたものである。

1月15日 道具の年取り 普段使っている道具である農具・鉋・鎌・火棚などに餅を供える。火棚には2枚、それ以外には1枚ずつ供える。

1月15日 牛馬の年取り 餅を牛には9枚、馬には12枚供えることになっている。この餅は藁ヅトに入れてトリ木(唐臼を踏むとき手を載せておく所)に掛けておく。

1月15日 ヤッカガシ ゴマの木の串に煮干・昆布・豆腐を挟んだものをヤッカガシというが、年男はこれを家のすべての窓に挿して戸締りをする。

1月15日 ホガホガ 豆糠と豆腐粕とソバ粕を混ぜたものを1升枀に入れて、子どもたちが「豆糠もホガホガ、豆腐粕もホガホガ、ソバ粕もホガホガ。浄法寺の嘉助ドの金コァヤらくるは飛んで来る」と唱えながら枀から撒き、家の周囲を3度まわる。その家では子どもたちに銭を与える。

1月15日 田植え 雪の上に松の葉・豆の殻・藁の3種類を植える。

1月15日 ガワを立てる 先端にガワをつけた竿を庭に立てた。キュウリだといってゴマ木で作ったものを下げた。また、カケトシナを4本繫いだものも下げた。竿を倒すときは小豆粥を撒く。

1月16日 成木責め 子どもが2・3人で鉋かマサカリで梨の木を伐るまねをした。「ナルカナラネカ、ナラネエバキルゾ」という問答をした。(ふつうこの行事は柿の木でやるが、下斗米地区には柿の木がない)

1月17日 粟穂刈り 15日に飾った粟穂の下に箕を置き、粟穂を鎌で切り落とす(早生)。中生は26日に、晩生は29日か30日に切り落とす。

(日付不定) 節分 夕飯後、年男が鍋で大豆を炒っ

て一升枧に入れ、常居と台所で、「鬼は外、福は内、鬼の目玉打ち潰せ」と唱えながら豆を撒く。家族の者はそれを拾って食べる。翌朝、馬にも少し食べさせる。

②春・夏の行事

2月1日 1日から3日まで仕事を休む。

2月の卯の日 八皿 煮豆を作る。ドベ（酒の粕をお湯で溶いたもの）をヒヤゲ（片口）に入れて皆の前に出し、それを八つの椀に分けて、煮豆を食べながら家族全員が飲む。飲み終わったらヒヤゲに水を入れ、それで椀を洗い、その水を軒にかけると火事にならないという。

2月の辰の日 火祭り 桶に汲んだ井戸水を柄杓で屋根の四隅にかけて、火事にならないよう祈った。東隅から始め、北・西・南と回ることになっている。

2月の午の日 初午 若者が適当な家を宿にして遊んだ。

2月15日 お釈迦様の命日 餅か赤飯で祝うことになっている。寺では和尚さんが米の団子を本堂の前で撒き、子どもたちはそれを拾った。これを食べると病気にならないという。

彼岸 冬の間、炭焼き以外の人は草鞋や縄などを作り、農作業の準備をして過ごしていたが、彼岸が来れば1年分の薪を用意した。この頃になると鳩がやって来て、「出て来い、出て来い」と鳴いたものだ。

3月3日 桃の節供

3月8日 古峰ヶ原講

3月16日 農神様 この日は農神様が種を持って下って来るので、一升枧に団子を16個入れて供える。

3月23日 愛宕様 地区の外れにある愛宕様にお参りし赤飯を供える。

3月23日 二十三夜講 以前は二十三夜講があって月の出を拝んだものである。月の昇る位置と輝きの具合によって作物の豊凶を占った。

（日付不定）八十八夜 農作業を始める目安となる日である。この頃、トド（ホトトギス）が飛んで来る。「トドの初蒔き」、1週間後は「カッコウの中蒔き」、その1週間後は「アッチャトンデッタ（テッペンカケタカ）の捨て蒔き」といい、種蒔きの時期を決めた。

4月8日 お薬師様 赤飯を供えて拝む。二戸市米沢の薬師様、一戸町西法寺の薬師様などへ参詣する者もいた。

4月18日 天台寺のお祭り 赤飯を炊いて祝う。実際にお参りする者もいた。

5月4日 夕方、菖蒲と蓬を窓ごとに挿して戸締りをする。夕食には煮しめや生魚を食べる。

5月5日 端午の節供 この日にホド（山野に自生する芋の一種）を食べなければウジになるという。鱒・赤魚・長芋などを食べる。

5月5日 舅礼 新婚夫婦は舅礼に出かける。

6月1日 ムケノツイタチ ムケノツイタチなので桑の木の下へは行くなという。桑の木の下に人のムケガラがあるのだそうだ。

6月1日 鬼の骨をかむ 正月の鏡餅を干しておいたのをこの日に食べる。これを「鬼の骨をかむ」という。

6月13日 七観音 七観音をかけるといって、大宮神社・日ノ沢観音・岩谷観音・朝日観音・鳥越観音・安比観音・桂清水観音と巡礼する者もいる。

7月7日 七日盆 井戸さらいをする。このとき、若水汲みのときに井戸へ投げ入れていた餅を取り、干しておく。これは虫歯の薬になるという。

7月13日 盆の準備 13日と14日の早朝、馬の飼料にする草刈りをする。15日と16日は草刈りを休む。13日の朝食後は墓掃除をする。女の人たちは豆腐・ところん・麩などを作り、料理の支度をする。奥座敷に棚を作り、位牌を並べる。棚の支柱に桔梗や粟花を昆布で結びつける。夜は門口で火を焚き先祖の霊を迎える。門口では17日まで火を焚く。

7月14日 盆 14日から16日まで毎朝、赤飯を炊き供える。夕方には墓前で松を焚く。新しいホトケサンがあるときは、近親の人を招いて四十八灯籠を点け供養する。四十八灯籠は家の近くの道路の両脇に48本の竹を立て、その竹ごとにローソクをつけ灯すのである。

7月16日 盆の終わり 稲穂やその他の農作物で穂が出たものを供える。昼にはうどんを供える。午後、盆中の3日間に供えた物にキュウリで作った牛を添え、それをコモで包み昆布で結わえ川に流す。これで盆は終わり、位牌を仏壇へ戻す。

③秋・冬の行事

8月15日 月見 餅を5枚入れたお膳を箕に載せ、箕をコガの上に置く。ススキを添えて縁先に置き、月を拝む。枝豆も供えるが、これの食べ殻は屋根に投げ上げる。

9月29日 終い九日 餅を搗き、米のストギ（案）を作り、神棚へ供える。藁ヅトにストギを入れ、井戸や麦畑にも供える。9月9日を初九日、19日を中九日、

29日をシマイ九日という。

10月20日 二十日講 夏の間、農作業を手伝ってくれた人たちを招き、午前は畑の中耕とか薪取りをしてもらい、午後からはご馳走をする。

11月24日 オダイシサマの年越し 小豆粥に桃の木で作った箸1膳と、その他に長いもの1本を添えて神棚に供える。長い1本は杖である。オダイシサマには子供がたくさんいて、大変貧乏しているから、他家の稲二ホから穂を抜いてきて粥を炊き、自分は弱った体を杖で支えながら、子どもたちに桃の箸で粥を食べさせているのである。この杖を使って文字の練習をすれば上手になるという。

毎年、この頃は天気が悪く、「タイシコ吹雪」があるといわれている。ふつう、箸は箸木で作る。ミダマの箸も箸木で作る。桃の木で作るのはこの日だけである。

12月2日 稲荷さんの年越し 豆ストギを供える。

12月5日 恵比寿様の年越し 大黒様も呼ばれて来るのだといって、2膳供える。魚を必ず添える。

12月8日 お薬師様の年越し 串餅をこしらえ、8串供える。

12月9日 大黒様の年越し 豆ご飯や田楽豆腐など、豆料理を作ることになっている。これに餅と二股大根を神棚に供える。大黒様は餅好きで、ある家に招かれて食い過ぎてしまった。家に帰る途中、小川で大根を洗っている女がいたので1本くれるように頼んでみた。「この大根は主人のものだから上げられない」ということだったが、二股大根の片方だったら本数に変わりはないということで貰い受け、やっと食べることが出来た。そのため大いに助かったという話である。

12月10日 瘡瘡神様の年越し 昔は赤飯を炊いて供えたそうである。今はやらない。

12月12日 山の神様の年越し 餅を搗き、お膳に12枚入れて供える。山の神様は12人の手持ちだという。木材業者や木炭業者は杣夫や焼き子と呼んでご馳走をする。

12月16日 オシラサマの年取り ウキウキ団子を作り供える。この日は天気の悪いことが多い。これを「オシラ吹雪」という。

12月17日 子安様の年越し

12月19日 蒼前様の年越し

12月20日 氏神様の年越し 氏神様である大宮神社へ餅を供える。

12月22日 聖徳太子の年越し 聖徳太子は職人

の神様である。

4. 安代町田山の年中行事

話者：畠山一郎・八幡ツエ

時期：昭和56年11月

① 年末・正月の行事

12月27日 煤はき 新しい柴を採って来て箒を作り、それを長い竿につけて煤を払う。箒には2・3本でもいいから柴を混ぜて作るものだという。東の方を先に掃いてから、家全体に取りかかる。使い終わった箒と竿は、庭の堆肥に立てておく。煤も堆肥の所に置く。1月15日に、箒と竿を立てておいた所で田植えをする。煤はきの晩はお膳を作り神棚に供える。この日は米の飯を食うことが出来るので、前々から楽しみにしていた。

12月28日頃 餅つき 大きいお供え(径30センチ位、三つ重ね)は神棚に、小さいお供えは家族の男の数だけ作り、山の神に供える。山の神にひとつ、蔵にひとつ供える家もある。29日に搗くことを嫌がるということはない。小正月にも餅を搗き、お供えを上げるので、小正月が終わってから、大正月のお供えと小正月のお供えを藁のツトに入れ、6月1日まで干しておく。

大晦日 門松 門松は玄関の両側に2本立てる。松を採って来る日は特に決まっていない。3階の松が良いとされる。年神様がどこから来るというようなことはいわない。年神様の棚を造るようなこともない。

大晦日 年取り 年取りの晩はご飯を早く食べることになっている。そうしないと新しい年に仕事の進み具合が遅くなってしまうのである。そんなことで、5時頃には食べたものだ。夕飯がすめば、年をひとつ取ったと思った。夕飯が終わると子どもにお年玉を与えた。お年玉のことをウマッコといい、それを与えることを「ウマッコに乗せる」といった。

年取りの晩と元日の朝だけは、出稼ぎとか兵隊に行つて家にいない人の分までお膳を作ったものである。その人たちにも正月を迎えさせるという意味である。

1月1日 大正月 大正月は男の正月である。

1月1日 若水 朝早く起きて若水を汲む。鳥の声を聞く前に汲むものだという。水を汲む所をカドといい、そこで木の桶にヒヤグ(柄杓)で汲む。おじいさんが汲むのがふつうで、その若水で朝ご飯を炊くことになっている。

朝には雑煮を食べることになっている家もあった。神棚へ供えておいたお供えの上にこの日、小豆餅と白い切り餅を自分が食べる分だけ載せて拝み、その餅を下ろして雑煮にする。

1月2日 お舅礼 結婚まもない夫婦は、嫁の実家に挨拶に行く。実家では、婿が来たからといって、親戚の人を招きお祝いをする。

1月2日 大日堂参り 近くの秋田県小豆沢の大日堂へお参りする。

1月5日 五日正月

1月7日 七日正月

1月7日 ポーポー 山の神様へ供えておいたお供えをこの日の朝に焼いて、子どもや年寄りがポーポーと叫んで鳥を呼び集めて投げ与える。そのとき藁に、11歳以下の者はその年齢の数だけ、それより多い者は12か所に印をつけ、山の神の木に下げて来る。厄年（男は42歳、女は33歳）の人が家族にいる時は、その年齢の数だけ藁をねじり、木にぶら下げておくという所もある。

1月8日 この日の晩、出羽三山をかけた人たちが宮田神社の近くのジョウヤ（浄屋）へ集まって神様を拝む。これは今でもやっている。集まるのは20人位で年寄りが多い。以後、毎月8日にやる。

1月11日 肥出し 2、3回だけだが、実際にマヤから肥を出した。

1月14日 餅つき 小正月の餅を搗き、マメボ・アワボ・コメボを作り、部屋に飾る。マメボは柳の枝に餅を小さく丸めたものを挿し、その枝を俵かカマスに挿す。アワボはやや大きい楕円状の餅を竹か柳に挿したもの。コメボは藁束の先端の方に餅の小さいのをつけたものである。

1月15日 小正月の年取り 小正月は女の年取りだという。お供えに塩と煮干と松と昆布を添えて供え、女が先に拝む。煮干はそれと同じようになるまで長生きするようにとの意、昆布は喜ぶにかけたものである。

土の中にいけておいた大根や人参などを刻んでおく。翌16日は刃物を使われないので、予め準備しておくのである。

1月15日 田植え 11日にマヤから出した肥のところで田植えをする。藁・小豆殻・豆殻・ソバ殻・稗殻を植える。

1月15日 ツカダの年取り 鍬、唐鍬など普段使っている道具類に餅を供える。

1月15日 ミダマ・ママ 晩に、握り飯を12個作り、膳に紙を敷いた上に載せ、神棚へ供える。これをミダマ・ママとかニダマメシという。20日頃に下ろし、藁ツトに入れて干しておく。干したものは糸巻きなどの仕事をしながら食べる。とにかく粗末にはしていない。

1月15日 豆占い 炉の灰をきれいにならし、豆を12個並べ、その焼け具合によって月ごとの天気を占う。

1月15日 苗代 苗代をこしらえるといって、炉の灰をきれいにならした。そこに足を入れて灰をかき乱すと、本当の苗代を作ったとき、鳥が入って苗代を荒らすことになるという。

1月15日 月見 この晩の月の出る方角や時間などで、世中がいいとか、悪いとかいった。世中がいいというのは豊作になるということである。

この晩、最後に寝る人はカギヅキ（自在鉤）に餅を吊す。翌16日の朝、一番早く起きた人がこれを取る。取った人は力が強くなるという。

1月16日 ホトケサマの年取り 15日の晩と16日は魚を食べられない。16日は地獄の釜の蓋が開くといわれていた。この日は「親の折檻、子は聞かぬ」といって、誰もがまったく自由に振舞える日であった。近くの神社へも参拝したが、それが若者にとっては大変な楽しみで、いい着物を着て出かけたものだ。兄畑や苗代沢まで足を延ばし、10か所位参拝することもあった。今はお寺参りだけである。

1月16日 裸参り 田山稲荷神社へ願掛けする人が裸参りをする。

1月16日 お百度参り お百度参りもこの日にする。以前はひとりで100回お参りするのだったが、今は他人に手伝ってもらう。したがって、10人でするとなればひとり10回ずつ、20人の場合は5回ずつということになる。昔は一文銭を100枚用意し、お参りのたびに1枚ずつ置いて回数確かめたものである。

1月20日 ポーポー 1月7日と同様に、朝、ポーポーと叫びながら鳥に餅を投げ与える。鳥は山の神様の使いだという。20日で正月は終わる。

②春・夏の行事

2月1日 年祝い 厄年（男42歳、女33歳など）の人がいる家へ行き、無事にその年を過ごせるようにとお祝いをする。

2月1日 本家礼 分家が本家へ挨拶に行く。

2月7日頃 火祭り シント（神主）を頼み、火事を防ぐためお祓いをしてもらい、ソバか餅を食べた。この頃、悪病払いだといって、シメをない、ムラはずれに下げている所もあった。

2月9日 山の神様 山の神様が木の本数を改める日なので、山稼ぎしている人はこの日は仕事を休む。この日稼ぐと命にかかわるような大怪我をするという。

2月16日 寺参り 年寄りがホトケサンを拝みに寺へ行く。寺ではこの日に団子撒きをする。団子は檀家で供えたものである。

彼岸 アンコを入れた団子を寺へ持って行き供える。昔は初彼岸・中日・送り彼岸の3回持って行ったものだが、今は1回だけになっている。

社日 田山稲荷神社に参拝した。春の社日には燕がやって来、秋の社日には帰って行くという。

3月3日 サガサニチ 冬の間に山で伐っておいた薪を川に流し始める日である。4月20日には川止めになるので、それまでに流し終えなければならない。4月20日以降は、川の水を田に入れるようになるため、薪を流すことは出来なくなる。

3月16日 十六団子 ウキウキともいう。米の粉で十六団子を作り小豆に入れて食べた。十六団子とは16日に作るのものでそういうのであって、16個作るというのではない。

この団子を食べると田畑に稼ぎに出るようになる。そのためこの日は農作業の目安になる大切な日であった。矢神岳の雪が牛の形に見えるようになったり、山に咲くコブシを田打ち桜といい、これが咲き始めるのも農作業の目安となった。

3月16日頃 山出し 十六団子の頃、山出しといって女の人們が集まり一緒にご馳走を食べる。回り宿なのでその家の都合により日にちは一定しない。秋にも同じようなことをするが、それは「秋モウス」という。

3月16日頃 念仏講 婆さんたちも念仏講のため集まり楽しんだ。秋にもした。念仏講とはいうけれど、それは名ばかりであって、実際に念仏を唱えるわけではない。

八十八夜 苗代に種を蒔く目安にする日である。昔は稗も田で作ったが、そのときは苗代で苗を育てた。稗は米に比べて苗が伸びすぎるので、先端を切ってから植えた。大正の末頃になると米作りが盛んになり、田で稗を作る人はいなくなった。

4月3日 荒屋新町のお不動さんの祭り

4月8日 薬師様の祭り

4月18日 浄法寺の御山（天台寺）の祭り

5月4日 戸窓ふさぎ 晩に菖蒲と蓬を窓ごとに挿した。これを「戸窓ふさぎ」といい、挿すのが遅くなると鬼が家の中へ入るから早く挿すようにした。家によっては軒に挿すが、この場合は屋根の四方に3か所ずつ挿すことになっていた。菖蒲湯もたてたが、これに入ると病気が治るといふ。

5月5日 ホドイモ 山からホドイモを掘って来て食べれば、1年中安全に暮らせるという。

5月5日 節供礼 新婚夫婦が嫁の実家へ行く。

5月5日 馬の節供 朝、馬を連れて蒼前様へお参りする。仕事は休んだ。

6月1日 歯固め 正月のお供えなど、干しておいた餅を食べる。

マンガアレイ 田植えは5月中にすませるようにした。田植えが終わるとユイッコ（結一農作業などでお互いに労働力を交換し助け合うこと。ここではそれをした人びとの意）でお祝いをした。この祝いをマンガアレイ（馬鍛洗い）といった。マンガアレイが終われば、露を採ってもよいことになっていた。露を採り始める時期を合わせようということらしい。

馬を放牧地へ上げるのもマンガアレイの後だった。牛は春、草が出たときすでに上げているが、馬は農作業で使うためこの時まで家においたものである。馬は夏の土用には下げた。土用から草を刈り、堆肥を作るためである。牛は秋になってから下げた。

虫送り 日にちは一定しないが、田植えが終わってから虫送りをする。藁人形2体（男女）を作り、太鼓を叩いて行列を作って送り、最後に川に流す。流さずにしばらく藁人形を立てておく所もある。今はやらなくなった。

7月7日 ナノカビ 「7かえり(回)マンマを食って、7かえり水浴びをする」という。

7月7日 盆の準備 13日から盆なので、その前に道路掃除・墓掃除・井戸さらいなどをした。盆花とは桔梗のことで、13日までに山から採ってくる。盆中使うのでたくさん採る。昔は草刈山にいっぱい咲いていたものだった。

7月13日 盆棚作り 葎の簀を棚に敷き、蓮の葉や桐の葉の上に、曲がったキュウリ（これをウマッコという）や青いリングを載せ供える。

7月13日 草刈り 13日朝から20日までは盆のため仕事は休みとなる。ただし、草刈りだけはする。13日の朝、早く起きて草を2日分刈る。14日に草刈りするとホトケサンの足を刈ってしまうからといって、これは禁じられていた。

7月13日 墓参り 今は13日の夕方に墓参りするけれども、昔は14日の朝にしたものである。

7月14日 四十八灯籠 新しいホトケサンのある家では3年間、四十八灯籠をつける。墓から家までの間の道路の両側に柴か竹を48本立て、それに1本ずつローソクを点す。15日の夜にもする。

7月16日 ホトケ送り ホトケサンを送るのは今は16日の昼頃だが、以前は16日の晩方だった。盆棚へ供えていた物を葦の簀で包み川へ流した。今は焼いてしまう。

7月16日 送り火 この晩は墓前で火を燃やす。

7月16日 盆踊り 盆踊りは折壁は15日、田山は16日というように、地区ごとに決まってお互いに行き来して踊ったものである。昔は夜明けまで踊った。今は11時頃で終わる。20日にも踊る。

盆が過ぎると、秋の彼岸まで萩刈りや干草刈りをした。牛馬の飼料にするためである。干草シマを作って乾燥させた。

③秋・冬の行事

8月15日 月見 茅の穂を立て、果物・豆を供えて満月を拝む。子どもたちはカッコベ（籠）を持って各家を回り、供え物をもらって歩いた。子どもの楽しみの1つだったが、今はやらなくなった。

9月9日 豆ストギを作り、神様・仏様に供える。

9月29日 田山稲荷神社のお祭り 10月は神無月なので特別なことはしない。ご祝儀も10月にすることはほとんどない。ご祝儀の多いのは4・9・11月である。

11月 ダイシコ 11月をダイシコ月という。4日を初めダイシコ、14日を中ダイシコ、24日を終いダイシコという。初めダイシコと中ダイシコには小豆粥に茅の長い箸（40センチ位）を添えて、神棚へ供える。終いダイシコには、ご飯が小豆粥に茅の長い箸を添えることになっている。ダイシコというのは、痩せた人の姿を書いたお札だったが、戦後は配布されなくなった。ダイシコには子どもがいっぱいいるので、短い箸だと食事が皆に行き渡らないため長い箸を使うのだという。この日はダイシコブキといって雪が降ることが多い。

12月3日 お不動様の年取り ストギを作り供える。米の粉を丸めて煮たのが餅（搗かなくても餅という）、煮ないのがストギである。

12月5日 恵比寿様の年取り ストギを作り供える。

12月7日 八坂神社の年取り ストギを作り供える。

12月8日 お薬師様の年取り ストギを作り供える。

12月9日 大黒様の年取り ご飯にもおかずにも豆を入れる。

12月12日 山の神様の年取り 餅を搗き、お供えを取って供える。山で稼いでいる人は11日夜からご馳走を食べ、12日は仕事を休む。山の神様は女の神様だという。それで、女の人は山仕事へ行ってはいけないし、山の神様に供えたものを食べてもいけない。

12月15日 八幡様の年取り ストギを作り供える。

12月20日 稲荷様の年取り ストギを作り供える。

12月23日 明神様の年取り ストギを作り供える。

12月25日 天神様の年取り ストギを作り供える。

5. 湯田町白木野の年中行事

話者：小原徳精

時期：昭和57年1月

①年末・正月の行事

12月20日 過ぎ 煤はき 日にちは一定しない。煤はき用の箒は藁の根元を先端にして、竿に結びつけたものである。箒は2本作るが、竿には田かきのとき、馬のクチドリに使った竿を用いることになっている。集まった煤は明きの方の雪に穴を掘り、その穴に棧俵を敷き、棧俵に載せて焼いた。その煤が完全に焼けてしまうと喜ばれた。ふだんはあまり魚を食べるといことはなかったが、この日は「煤はき祝い」といって、ハタハタを食べ、濁り酒を飲んだものである。

12月28日 餅つき この時は米の餅だけを搗いた。小正月には栗餅も搗いた。1臼が6～7升位のを4臼搗いたが、そのうちの2臼は干し餅にするものだった。お供えは1月11日の鏡開きの日に食べた。

大晦日 門松 年越しの日に山から松を伐って来る。枝が3階になっているのが良い。神棚・玄關・居間に1本ずつ御幣と一緒に立てる。1本余分に伐って来て、昆布で松の枝を結わえたものをお供え餅（三つ重ね）の上に載せ供える。

大晦日 年越し 夕飯を食べることが年越しで、普通の日より早く食べるようになっていた。まず主人が風呂に入り、その後に男たちが入り、「年徳神」と書いて

た掛け軸を常居に掛けて、それに餅とご馳走を供え拜んでから年越しをした。ご馳走は煮しめ（山百合・昆布・凍み大根・ニドイモ・サツマイモ）や魚などである。魚はハタハタや新巻き鮭で、いずれも秋田県側から入ってきた。年越しがすめば年が増えたと思った。

大晦日 囲炉裏の灰 大晦日には囲炉裏の灰を網で通してきれいにした。元日には塩を撒いて清めてから火を焚きつけた。元日には火打石で火をつける家もあった。

1月1日 元朝参り 地区内の神社（山の神1、稲荷2）と庚申様にお参りをする。庚申様は火災を防ぐ神様である。

1月1日 トロロメシ 朝食にはトロロメシを食べることになっていた。カデの入らない飯だから楽しかった。元日の朝には餅は食わない。

1月1日 正月礼 分家が本家へ挨拶に来る。餅と酒を土産にする。本家では礼返しといって、同様の土産を持って2日か3日に分家へ行く。また、結婚して間もない嫁は実家へ帰って来るようになっていた。遅くとも6日までには嫁ぎ先へ戻るようになっていて、「七日帰り」は嫌われた。

（若水を汲むという習慣はない。）

1月8日 八日オレ この日を八日オレというが、どんなことをするのかわからない。（筆者：八日お礼カ）

1月11日 仕事始め 朝起きたら、田かきの時に馬鋤を引っ張る縄をない、それに小さく切った餅と、松の小枝を藁で結わえ付ける。この縄をなえば、この日は休みである。

1月14日 小正月の餅つき 粟穂と米穂を作る。粟穂は藁1本に長四角と丸い餅をつけたものを6本ずつ束ねたのを2個、米穂は藁に小さくちぎった餅をつけたのを12本である。これらを「年徳神」の軸の横隣に吊るした。

1月15日 小正月 小正月は15日と16日で、15日は年取りである。

1月15日 成木責め 梨の木に鉈をぶつけながら、「今年、梨はなるか、ならぬか。ならぬば伐ってしまうぞ。ならば残しておく」と唱えた。

1月15日 若木を焚く 「若木を焚く」といって、ナラの木の枝を伐って来て、薪に混ぜて焚いた。この火に当たると若返るのだという。

1月15日 カギの餅 火棚から下げているカギに、餅に穴をあけて藁を通したものをぶら下げた。

1月15日 道具に餅 火棚・米櫃・農具など普段使っている道具に餅を供える。

1月15日 影見 晩、満月を背にして雪の上に自分の影を映したとき、首が繋がって見えればいいが、離れているように見えると良くないという。

1月15日 この日に早く寝ると白髪が生えるというので、遅くまで起きていたものである。

（庭田植えという習慣はない。）

1月16日 藁打ち 朝早く起きて苗を束ねる藁打ちをした。藁を打つ音がすれば、それを聞いて貧乏神が家に入ってこない。15日の晩から16日にかけては、福の神でも貧乏神でも入って来易いように家には鍵をかけないで置く。この日の朝は餅と魚と酒を口にすることは禁じられている。昼からはよかった。

1月19日 厄払い 各家から1人ずつ藁を持ち寄って地区公民館に集まる。9時頃から1メートル位の藁人形1体を作り始め、1時間程で完成する。大きな男根をつけるのが特徴である。完成した藁人形にはお神酒を供え、全員で地区の安全を祈願した後、行列を作り太鼓と法螺貝ではやしなながら地区の外れまで運び、小高い所の木に縛り付けておく。藁人形の顔は他の地区の方に向けることになっている。これは他所から疫病が入るのをここで防いでもらうためである。200年以上も昔、疫病が大流行したときから始まった行事だという。

1月20日 松引き 大晦日に飾った家の中の松を下げ、川へ持って行って流す。家族に厄年の人がいれば20日ではなく末日に行く。

1月21日 ソイコ ソイコのため仕事は休む。ソイコの意味は不明。

1月22日 この日からは本格的に仕事をする。正月気分が抜けると、男の仕事の大きなものは3月頃までかけて1年分の薪を用意することであった。木を伐りに出かけることを「木山に行く」といった。

節分 節分には豆まきをした。その豆を炉端に並べ、豆の皮の割れ具合で1年間の天気を占った。よく割れれば豊作だということであった。また、豆を拾っておき、木山など危険な所へ行くとき、3粒食って出かけると危なくないといわれた。

②春・夏の行事

2月1日 ツイタチ正月 仕事は休む。

2月15日 お釈迦様の死んだ日 小正月に飾った後に保存しておいた粟穂・米穂を食べる。

彼岸 ポタモチを作りホトケサマに供える。

社日 危険な仕事に出ると怪我をするので、この日はそのような仕事はしないようにする。

3月3日 節供 菱餅を作る。この菱餅は前年に採っておいたヤマゴボウの葉を入れた草餅で、「鬼の舌」ともいう。この日、嫁は里帰りをして1晩位泊まる。

4月1日 座るためのゴザカムシロを持ち、重箱に煮しめを入れて、見晴らしのよい山へ出かけた。この頃、桜・椿・梅がいっせいに咲く。

4月8日 薬師様の祭り 本屋敷の薬師様の祭りである。目と耳の悪い人は必ずお参りをする。耳の聞こえない人は穴の開いた石に紐を通して供えて来るので「穴薬師」ともいっている。

4月9日 稻荷様の祭り

4月12日 山の神様の祭り

庚申様の祭り

5月5日 節供 4日を宵節供といい、菖蒲と蓬を四方の軒に挿す。東ねて風呂にも入れた。餅を搗く。嫁は里帰りをする。

6月1日 歯固め 正月に搗き、縁側などに吊るしておいた鏡餅を食べる。

6月24日 安産を祈願するため、嫁たちは柳沢地区桂子沢にあるショウレンジにお参りする。

7月7日 マンダラ参り 県境を越えて間もなくの秋田県山内村黒沢にあるマンダラにお参りする。近くの熊野山神社に梵天があげられたのを見に行く。

7月7日 七日盆 この日に桂の葉を採り干しておいてホトケサマの抹香にした。13日に作る盆棚に敷くスノコの葦をこの日の朝に採って来て、乾かしておく。

7月13日 草刈り この日は1日中働く。ふつう草刈りは1日に2回するものである。13日は夕方に出かけたときは、この日の晩の分と14日の1回分とを刈る。14日には1回だけ出かける。

7月13日 盆棚 盆棚を作り、灯笼・スモモ・ウドン（5～6本ずつ束ねたもの）などを吊るした。ミソハギとコガネバナを盆花というが、これもこの日に採ってきた。

7月13日 迎え火 家に入ってくる道端で木っ端を焚く。この火をローソクに点け盆棚に供える。16日は送り盆だが、この時は13日の逆で、ローソクの火で木っ端に火を点ける。13日は墓参りをしない。

7月14日 墓参り 朝ご飯前に墓参りをする。

7月16日 盆の終わり 盆棚は送り火のときに解

体し、蓮の葉に載せていた供え物を包み、川へ持って行って流す。葦で作ったスノコのうち4本だけは残しておき、11月24日のオデイシコのときの箸に使う。

7月20日 二十日盆 ご馳走を作り、仕事は休む。盆に実家へ拜みに行けなかった嫁などはこの日に行く。盆踊りは七日盆から二十日盆まで踊る。

7月21日 ソイコ 仕事は休み。

二百十日 田に行つて草刈り鎌を振り回す。鎌が穂に当たってカラカランと音がすると豊作、しないと不作だという。

③秋・冬の行事

8月15日 田の神 田の神が山の神に代わる日だという。この神様は女の神様である。

8月15日 名月様 夜、名月様に枝豆・芋の子・団子を供える。枝豆は枝をつけたまま茹でて供える。

9月9・19・29日 ミクニチ 9月の9・19・29日を合わせてミクニチといい、餅を搗き神様へ供える。9日を「初九日」、19日を「中の九日」、29日を「末九日」とか「刈り上げの九日」という。29日までには稲刈りを終える。

10月 秋休み 10月中の都合のよい時期に「秋休み」をし、嫁は10日間も里帰りしたものである。この休みが終わってから稲こきをした。昔は雪が降るようになってから稲こきをしたものである。

11月24日 オデイシコ オデイシコという子どもがたくさんあった貧乏人がいた。塩がなくなったので町まで買いに行ったが、フキドリして（凍えて）途中で死んでしまった。その供養のためにこの日は塩も砂糖も入れないで団子を作り、これも味をつけないアノコに入れてドンプリに盛り、葦の箸2膳を添えて供えた。葦の箸はお盆に使ったスノコから4本だけこの日のために残しておいたものである。オデイシコの日には必ずといっていいほど吹雪になったものだ。

12月5日 恵比寿様の年取り 神棚にお膳を供える。ご馳走はハタハタの寿司漬け、凍み大根とジャガイモの煮付けたもの、小豆飯などである。川からカジカを捕って来て生きたまま供える。カジカを捕れないときは鯉を供えた。

12月8日 薬師様の年取り

12月9日 大黒様の年取り 小豆飯とマッカ（二股）大根を供える。形のいいマッカ大根はそうたくさんあるものではないので、秋に大根を掘るときいいものがあれば、これは大黒様に供えるのだといって取り

除いておいた。

ある時、農家の婆さまが大根を洗っているところへホイドコ（乞食）が来て、「腹がへっているから何かかせろ（食わせろ）」といった。婆さまは何もくれなかったのでホイドコは「その大根でもいいからかせろ」と頼んだ。婆さまはマッカ大根の片方を欠いてやった。大根をもらったら、ホイドコの姿が急に見えなくなった。それが大黒様の化身だったという。

この日は豆料理を48種類供えるものだというので作ったが、いくら考えても46種類しか作ることが出来なかった。残りの2種類とは手豆と足豆のことで、手足に豆が出来るほど稼げば果報が来るとの意である。

12月12日 山の神の年取り

12月13日 オカノカミの年取り この神様は女の神様だという。

12月17日 馬頭観音の年取り

6. 釜石市栗林町上栗林の年中行事

話者：藤原熊男・栗沢功

時期：昭和59年2月

①年末・正月の行事

12月27日 煤はき 箒草に柄を付けて箒にし、最初はカギツゲ（自在鉤）の煤を落とす。家全体の掃除が終わったなら、カギツゲから取った煤を家の外に出し、タラバヤシ（棧俵）に板を載せた上に煤を置き、火をつける。これを煤ユブシという。これに小豆飯を供え、使った箒2本を両側に置く。

12月27日 豆まき 煤はきの晩に豆まきをする家もある。この日にすれば節分にはしない。その年に不幸ごとがあったり、家族全員が揃っていなければ豆まきはできない。そのような場合は、豆を袋に入れその袋をカギツゲに下げておく。

12月28日 餅つき クニチ餅は嫌われるので29日に餅つきをすることはない。正月を迎えるための米を「年取り米」といい、以前は田が少なかったので2斗俵で買ったものである。米は遠野から買うのが通例であった。

大晦日 ミダマサマ 箕の上に紙を敷き、握り飯12個を並べる。閏年には13個にする。お供えも1組載せる。箸12膳を添える。箸は箕に置くだけで握り飯に挿したりはしない。

ひっくり返した臼の上にこの箕を載せるが、箕の口を向ける方向は暦を見て決める。この箕は座敷へ置く

家もあったし、部屋の隅に棚を設け、その棚に置く家もあった。いずれも1月4日までこうしておき、この期間内は仏壇ではなくこれを拝む。灯明を点す。

下ろしたミダマサマは正月が過ぎると煎って食べたりしたが、1個だけは残しておき、種蒔きのときに種に混ぜて蒔いた。箸は畑蒔きの時まで取っておき、畑へ持って行ってハセのような形にした。

大晦日 門松 11月15日に立てておいた栗柱2本に、松の枝と竹を結わえつけて門松を作る。栗柱の間に注連縄を張る。それぞれの柱の下部の周りにはハカマのように、4尺位の長さのナラのワツツァギ（割り木）を5本立てかける。太い木は四つ割りに、普通の木は二つ割りにし、皮を外側に向ける。このナラのワツツァギは「鬼打ち木」といって、節分の時に鬼を打つのに使うことになっている。葬式など特別な変わりごとがなければ、翌年も同じワツツァギを使う。栗柱はハセとして用いる。

大晦日 神参詣 門松に注連縄を張った後、神社に行き注連縄を張る。これが神参詣だが、これをしなければ年取りは出来ない。

大晦日 年取り 神参詣がすめば年取りで、神棚や仏壇にも膳を供える。この夕飯が終わると年を取ったことになった。

1月1日 若水 誰も起きないうちに、注連縄を張った桶と松を結わえ付けたヒヤク（柄杓）を持って行き、若水を汲む。米も持って行きそれを川に撒いてから汲む。その若水で飯を炊き、神様に供えることになっていた。その家に変わりごとがなければ毎年同じ人が、何かあった時は別な人が汲む。若水は3・5・7日にも同じ人が汲むことになっている。

1月1日 元朝参り 最近では元日に神参詣をすることが多くなった。以前は大晦日に参詣し、その時に参詣できなかった所へ元日になってからお参りしたものである。

1月2日 シュウド（舅）礼・仲人礼 2日か3日に新婚夫婦は3年間、嫁の実家へ挨拶に行く。土産として酒・赤魚（樽魚という）を持って行く。仲人にも挨拶をする。

1月2日 師匠礼 1人立ちした職人が師匠に酒・魚を贈って礼をする。

1月2日 稼ぎ初め 真似事でもいいから何か稼ぐ。木を伐ることが多い。

1月3日 サンガニチ 朝、正月になって初めて餅

を食べる。仕事は休む。

1月5日 ゴカンニチ 朝、餅を食べる。仕事は休む。

1月7日 七草 雪の下から芹を採り、おつゆに入れる。粥に入れるのではない。七草を刻む時に、「唐土の虎も、田舎の虎も、日本の土地に渡らんうちに七草はだけ」と唱える。

1月7日 飴コ八日 この日、飴を食わなければ鬼に舌を抜かれるという。「飴食いマチ（市）」が立ち、そこから飴を買って来た。

1月8～14日 餅合い 8日から14日までの間を「餅合い」という。小正月になると、「餅合い中はありがとうございました」と挨拶を交わしたものである。

1月13・14日 小正月の餅つきとミズキ団子 小正月用の餅を搗く。ミズキに米・小麦・粟・キミ・ソバなどの粉で作った団子を挿す。穀物や藨が豊かにできるよという意味である。団子には豆腐粕を混ぜて作るものだといわれている。竹に楕円状の餅を挿したのが粟穂で、昔は竹ではなく栗の枝に挿したものだ。粟穂は平年には12本、閏年には13本作る。マメコギに小さな餅をつけたのは豆である。

ミズキを飾るのに半日はかかる。団子が乾いて割れて落ちると風が吹いて落ちたといい、あまり落ちなければ、その年は台風や嵐が少ないというように判断する。

団子を挿したミズキはお蒼前様や釜神様にも供えた。お蒼前様にはマヤの入口に、釜神様にはヤダガマの所へ供えた。

1月15日 小正月 15日が年取りで、20日までが小正月である。

1月15日 馬の餅・牛の餅 馬の餅は12個、牛の餅は10個を藨ツトに入れ、お蒼前様に供えているミズキにぶら下げた。馬の餅を食べると妊娠期間が馬と同じ12か月になるから、女は食べてはいけない。牛の餅だったら食べてもよい。

ミズキ団子のミズキは小正月後もしまっておいて、夏に雷がなった時に焚く。落雷しないようにとのまじないである。

1月15日 モグラ追い 野菜畑などで馬の沓を曳き、「ナマコドンノオトオリダ、モグラドンハサレサレ」と唱えながら歩いた。モグラに畑を荒らされないようにするまじないである。大人も子どもも歩いた。

1月15日 木責め 柿や桃などの成木に、マサカ

リを持って構え、「ナッカ、ナンネエカ」「ナリマス、ナリマス」と問答をした。ミズキ団子を煮た汁を木の根にかけた。

1月15日 作占い 五穀を膳に並べそれぞれに餅を載せる。餅にたくさん付いた穀類が豊作になるという。五穀とは米・豆・稗・粟・ソバである。

1月15日 ヤラスリ 夕方に、「ヤラグロノ殿様、銭コモ金コモ飛ンデコウ、馬ッコノ餅モ飛ンデコウ、牛ッコノ餅モ飛ンデコウ」「オメデタイ、オメデタイ」と唱えながら、家の周りを3回まわった。この時、「豆ノ皮モホガホガ」といいながら、一升枡に入れた、煎った豆の皮を撒いた。

1月15日 ヤッカガシ 栗の木の串に、豆腐と餅と魚のヒレを挿し、これを家の戸口全部に挿す。この行事をヤッカガシという。戸を閉める時に、「ガイキハナダレハラヤクビ、上のけだもの貧乏神、オオキタニマツリダス」と大声で外に向かって唱え、ピシヤッと閉める。

1月15日 屋根葺き 夕方に、栗と笹と猫柳を藨で束ねたものを、家の戸口の上の軒に挿した。1か所に3本ずつ挿す。

1月15日 門松 大晦日にする門松と違い、この日は松・竹・注連縄は使わないで、屋根葺きを使う笹と猫柳を束ねたものを結びつける。

1月15日 烏呼び 子どもたちが「烏コー、烏コー」と叫んで烏を呼び、団子や餅を撒いた。昔の烏は呼べば降りて来て餅を取ったものだが、今の烏は逃げるだけである。

1月15日 天気占い 焔でクルミを殻ごと平年は12個、閏年は13個焼き、焼け方によってその年の月々の天気を占う。きれいに焼ければその月は晴れ、真っ黒に焼ければ雨という具合に判断する。

1月15日 モノマネ 夕食後、地区の若者たちが旦那の家を訪ね、牛馬や藨を買うと書いて紙で作った金を出し、出来るだけ高い値段をつけるようにした。今年は高く売れそうだということで、旦那の家では若者を歓待してご馳走したり、ミズキにつける藨団子をくれたりした。

1月15日 ナナミ ナナミといって、子どもたちが面をかぶり、トザマ（ボロボロになった着物）を着て家々を回って歩いた。訪ねられた家ではナナミ用として栗餅を用意していた。「どこのナナミだ」と聞いて、知っている子どもたちであれば多めに餅を与えたもの

だ。もらった餅を持って歩くのは大人の役目である。

1月16日 ホトケサマを拝む 親類のホトケサマを拝んで歩く。この日拝めなくても20日までには拝むようにする。お寺にもお参りする。

1月17日 初観音 新年になって観音様の最初のご縁日なのでお参りし、供えられた鏡餅をいただく。

1月18日 粟穂刈り ミズキに飾っていた粟穂を取り外す。これを「粟穂刈り」という。

1月20日 二十日正月 ミズキから団子を全部取る。この日で正月は終わる。仕事は休み。

この日が過ぎれば仕事が始まり、薪取りやツマゴ作りをする。夜と天気が荒れた日は履物作りをするのが普通であった。材料の稲藁は俵をほぐしたり、米を作っている家に何日も手伝いに行き、やっともらったものである。当時、この辺では米作りがまだ普及していなかった。製鉄所が出来てからは炭焼きする者もいた。

1月晦日 二月節供の年取り 餅を搗く。家族に厄年の人がいれば、庭の栗柱に注連縄を張る。

②春・夏の行事

2月1～3日 二月の節供 門松にタラポをつける。タラポは便所にも挿した。これは魔除けのためである。門松もタラポも2月15日に取り去る。

2月1日 厄払い 厄年の人(男は2と5、女は3と7と9)は年の数だけ餅を切り、紙に包み、それで体を拭き夜明け前に川に流すか、辻の角に置いて来る。この時は振り向いてはいけないし、人に会っても話をしてはいけない。紙包みには1銭を入れておくものだったので、それがほしさに子どもたちは辻で紙包みを拾い集めたものである。

2月9日 荷縄ハドシ この日は荷縄を休ませるために仕事をしない。「荷縄ハドシだから山に行かない」という。

2月9日 カカボンダシ 「お方(主婦)を家から追い出す」の意だが、仮にボンダサレても実家へは行かず、近所で時間をつぶして、家に戻って来なければいけないという。

初午 紫波郡の志和稲荷神社や地区内の馬頭観音碑に参詣した。

春祈祷 期日は一定しないが、2月頃にハヤリ神を呼び観音堂で春祈祷をしてもらう。参加するのは主として女である。

彼岸 寺参りをする。婆さんたちは宿を決めて百万遍をする。

3月3日 節供 草餅を作る。潮干狩りをする。仕事は休み。

3月16日 農神迎え この日に農神様を迎え、9月16日に送るといふ。中に小豆を入れた、径10センチ位の団子をいっぱい作り、野良仕事のコビルとした。

八十八夜 この日が来れば早生物は蒔いた。本格的に農作業が始まり忙しくなる。

5月4日 節供準備 夕方に菖蒲と蓬を家の入口の上の軒先に挿す。

5月5日 端午の節供 ヤマイモ(トロロ)を食べる。これの蔓の根元を折り耳に当てながら、「良いことを聞け、悪いことを聞くな」と唱えた。夜は菖蒲湯に入る。これに入ると風邪を引かない。1月2日と同様に、舅礼・仲人礼・師匠礼をする。

6月15日 馬ッコつなぎ 藁馬を2体作り、田畑や祠に供える。田畑では木にぶら下げておく。2体を耳のところで繋げ、耳に団子やハットウを挟んでおく。鳥の子どもがその団子やハットウを食うのに夢中になっているうちに親鳥は身を隠し、子どもをひとり立ちさせるという。

6月27日 鮫の上る日 鮫が隣の橋野村にある不動様に参詣するため、海から川に入り上ってくると伝えられている。食われてしまうので、この日は川遊びや水浴びをしてはいけない。

6月28日 不動様の祭り 橋野の不動様のご縁日。近いので参詣者が多い。

7月7日 墓掃除 先祖のホトケサンが盆に帰って来るため出発する日である。墓掃除をする。この日は「7回団子を食って、7回水浴びをしる」といわれている。

7月13日 ソウロダチ 夕方にソウロダチ(盆棚)を作る。座敷か常居に作り、棚の四隅に栗の枝を1本ずつ挿す。「南無阿弥陀仏」(宗派によって異なることもある)と書いた旗も1本ずつ挿す。棚には昔はスゲを編んだものを敷き、その上に位牌を置いた。今はゴザを敷いている。盆の間は毎朝、煮しめなど膳にして供える。キュウリ・ナス・モロコシ(トウモロコシ)・菜っ葉なども供える。供えた料理を下げる時は1つずつカボチャの葉に取っておき、16日にそれも送る。盆花とは桔梗と粟花のことである。

7月13日 迎え火 夕方、ホトケサマが家に入りやすいようにと庭先で松を焚く。これが迎え火である。

7月13日 サオ(竿)灯籠 初盆だからといって

特別にすることはない。サオ灯籠を立てる家はあるが、初盆でなくとも立てることもある。新しいホトケサンのある家では、他所の家のホトケサンを拝みには行かない。

7月14日 墓参り

7月16日 ホトケ送り（送り盆ともいう）盆中に供えたものをまとめ、石のきれいな川端に置いて来る。送るのは朝である。

7月20日 二十日盆 仕事は休む。

③秋・冬の行事

二百十日 ニンノウマツリ 地域の人たちが出て稲藁か麦藁で人形1体を作り、ムラはずれに持って行って納める。嵐を防ぐとか、流行病を防ぐという。藁人形には紙に顔を書いてつけ、腰には刀として丸木棒を差している。刀の柄には呪文を書いた紙を丸め結びつけた。呪文とは「二百十日の雨、北風大風まで祀ること」である。

8月15日 月見 縁側に薄や萩を飾り、お月様に枝豆や団子を供える。この供え物を女の人は食べてはいけない。枝豆の殻は翌16日に屋根に投げ上げる。この頃は稗刈りが忙しい。

9月14・15日 沢田の八幡様のお祭り 獅子踊・大神楽・虎舞などが奉納される。仕事は休み。

9月16日 農神送り この日、農神様を送る。3月16日と同様に団子を作って供える。

9月29日 しまい九日（刈上げともいう）餅を搗き、南にそびえる仙磐山へ持って行き供える。これを「オ山カケ」という。この日までに農作物の収穫は終える。干草刈りや萩刈りも終える。

10月20日 恵比寿講 大根はこの日までは生長するので抜くなどという。

10月23日 古峯神社のお祭り

11月15日 オタテギ オタテギと称して栗の柱を2本、1間半位の間隔をおいて庭に立てる。栗柱は皮を剥ぐ。山を持っていない者でも、これに用いる栗柱だけは他人の山から伐り出してよいことになっていた。大晦日にはこの栗柱に松の枝や竹を結わえ付けて門松を作る。オタテギは正月準備の最初のものである。

11月15日 ワカキ この日、ナラの木を伐り、割って乾燥させておき、これを12月末に正月用の餅を搗くために米や粟を蒸かす時の薪にする。この木をワカキという。

11月23日 オダイシサマ ダイシの粥を作る。この粥を食べる頃になると寒くなり、蠅もいなくなるという。

12月9日 稲荷様の年取り 小豆飯のお握りを9個作り供える。

12月10日 大黒様の年取り 豆腐田楽2つと大根2本を供える。大根の1本はマタガリ大根（二股大根）である。大国主命が餅をご馳走になりすぎ苦しんでいると、ある婆さんが気の毒に思いマタガリ大根をくれ、それを食べて助かったということから、マタガリ大根を供えるのである。

煎り豆を一升枡に入れて供え、「お大黒様に上げます。お恵比寿様に上げます」と何回も唱える。大黒様は耳が聞こえにくいからと大声で唱える。この日は手豆・足豆も加えて48種類の豆料理を作る。

12月12日 山の神様の年取り スットギ（黍）を三つ重ねにしたものを供える。スットギはうるかした（水に浸した）米を粉にして、水でしとねて（こねて）作る。この日は山仕事は堅く禁じられている。

12月17日 観音様の年取り スットギを作って観音堂に供える。

12月20日 ヌカエビス 餅に糠を入れて搗いた。イタチの年取りだといわれている。

12月28日 お不動様の年取り お不動様の年取りなので社に参詣する。スットギと酒を供える。